

現下の幼児教育論議



堀内 康人

幼児教育論 ③

去る八月七日、朝日新聞の夕刊に、次のようなニュースが掲載された。文相は、文教政策の重点の一つとして、人づくりの基礎である「幼児教育」の充実をとりあげ、文部省当局では、この意向にそって新たに「幼稚園教育振興計画」をたてることになり、その本格的検討に着手した。いまのところ、当局の考えている目標は、(一)人口一以上の市町村での幼稚園就園卒を六〇%（現在四〇%弱）に高める、(二)そのために公私立合わせて七カ年計画で全国に三千の幼稚園を新設する、(三)幼稚園の施設設備に対しては国庫補助をする、(四)幼稚園教員の待遇を改善して必要数を確保する、などが骨子となっている。同省としては、これを来年度予算要求の重点項目にとり入れる考えである。また幼児教育の充実については、幼稚園の普及のほか、幼稚園の義務制化、小学校入学年齢（満六才）の一年引下げ（満五才）なども将来の課題として検討する、というニュースで

ある。この報道がなされて一週間もたない九月十三日、同紙第一面トップに九段ぬきで「しつけ、道徳に重点」「小中学校と一貫目標」「予備校化は防ぐ」という大見出しではじまり、文相の諮問機関である教育課程審議会が、総会で「幼稚園教育課程の改善」について検討結果をまとめて、文相に答申した内容が明らかにされ、幼稚園教育の現状と改善の方向、幼稚園教育課程の改善について述べられていた。

先ず八月七日のニュースにもう一度目をとめてみよう。(一)においては、そのために公私立合わせて、というところで三千の幼稚園の新設がいわれているが、(三)においては、幼稚園の、ではじまり、公私立ともなんともわからない。公立幼稚園の国庫補助（或いはそれに類似の補助）は今にはじまったことではない。では私立幼稚園の国庫補助というように解釈していいものだろうか。(四)においても同じよ

うに幼稚園教員の待遇改善、必要数の確保をうたっているが、これもまた同じ論法で私立幼稚園教員の待遇改善、というように解釈してもいいものだろうか。そういう点が曖昧で、どうも納得しかねる。新聞紙上のことなので意をつくせなかった、というわけのものではないように思われるのである。全国の幼稚園のうち、その%以上を私立の幼稚園が占めている。そのほんの一部分は、雀の涙ほど、地方公共団体からの財政援助をうけておるが、他の大部分は、園児の保育料及びそれに類するものが幼稚園運営の財源であり、そこに勤める教員の待遇を改善する為には年々園児の保育料を上げなければならぬ。保育料値上げも地域差はあるにせよ、もう限度に来ているのが現状である。したがって、私立幼稚園の経済的運営は火の車、このまま良心的に幼稚園教育を続けることはできないようなところにおいこめられている。さりとて社会的意義のあるこの重要な教育をここでやめるわけにもいかないで、四苦八苦している姿が私立幼稚園の姿であり、こうした苦しみを口に出すことをさし控えているにすぎないのである。こうしたことを考えると、どうしても

(三)と(四)の国庫補助、待遇改善は、私立幼稚園をふくめてのそれであってほしいし、また幼児教育の充実振興というからは当然そうであるけれども無意味なものになってしまう。あまり勘繰るようであるが、当局のいう、公私立合わせて三千の幼稚園が、小学校の空教室であったり、幼児教育と小学校教育とでは教育方法の点でもその内容

の点でも非常なちがひがあるのかかわらず、小学校教員の幼稚園教員への横すべりでもされようものなら一大事であるし、前に述べたように、公立幼稚園、及び教員の国庫補助や待遇改善だけで終るならばそれは無意味というだけにとどまらず、全国私立幼稚園の総反響をうけること火をみるより明らかであり、そうなれば幼児教育の振興どころか、幼児教育の一大混乱がはじまるというものである。

まだ来年度予算要求の段階だ、そんなにめくじら立てて、公立だの私立だのと問題にするのは早い、という文句が出るのが予想されるが、そんな文句はこれまた無意味である。要求には要求の基礎があり、その基礎はあくまで幼稚園教育振興という一本の線、しかもその線は日本における公私立幼稚園の現状の中をつらぬいていなければならぬ。まだ予算要求の段階だから、公私立をばかしておいて何らさしつかえないなどということであつたならば、予算要求が通過したあかつきには、そのほかしたところで、多数の私立幼稚園が肩すかしをくわされる可能性があるといわねばならないだろう。

(四)の幼稚園教員の必要数の確保の問題は、教員養成の問題とつながる。全国に四十六の幼稚園教員養成の私立短期大学がある。ここでもまた困難な問題は山積している。幼稚園教員という地味な仕事よりも流手な仕事につきたい、それにはそうした仕事につけるような大学を、待遇の悪い幼稚園教員になる為の大学教育はまっぴらだ

という風潮から、幼稚園教員養成の私立短期大学志望者は寥々たるものである。幼稚園教員養成の私立短期大学もまたこのように青息吐息をつづけている。そこへ、幼稚園教員の必要数確保ということ、おびやかなりの教員養成所などがたくさん急造され、そこで教員の速成栽培をされたら、四十六の私立短期大学にどんな事態が起こるか、決して簡単にすまされない問題が出て来ることは火を見るより明らかである。ここでもまた私立幼稚園と同じように、私立短期大学に対する国庫補助の事が考えられねば、いたずらに混乱を招くばかりである。

幼児教育の充実から更に幼稚園の義務制化の問題までが将来の課題として検討されるということだが、よほど綿密な計画と実施が着実に漸進的に行なわれないと、せっかくの幼児教育振興の気運が波瀾万丈になってしまう。波瀾万丈の事態をひきおこさないで、所期の目的を達成する為には、(一)の公私立……はそれでよいとして、(二)と(四)はばかした表現でなくはつきりと次の通り書き改めねばならないように思う。(三)公私立幼稚園の施設設備に対しては国庫補助をする、(四)公私立幼稚園教員の待遇を改善する為には国庫補助、その必要数を確保する為には既成の幼稚園教員養成の公私立短期大学その他に対し国庫補助する、と。

次に教育課程審議会の文相への答申についてであるが、先ずマス・コミのこの問題のとりあげ方に一言なかるべからずである。大見

出して「しつけ、道徳に重点」などとやられたのでは、ただでさえ、第一面などは特に見出し読みを常習とする傾向があると思われる一般の人々は、幼稚園というところは、しつけや道徳の教育に関しては、これを軽視でもしているかのような印象をもってしまうわいとも限らない。もっと慎重にやってもらわなくては幼稚園の面目がたたない。ヒステリックにわめきたてるコマージュ、最近は安上りにいくというのであろうか、こまじゃっくれた子どもをつかつてのコマージュの連続射撃とつかと思えば人殺しテレビ番組と、落ち着きなどというものがこまの画面にも見られないようなテレビに影射されつづけている幼児たちを、現場の教師は四十名も時には五十名も一人で受け持たされているのである。大体文部省が示している幼稚園設置基準の中で、一学級の幼児数は四十人以下を原則とする、という原則が再考察されねばならない時機にきている。小学校の一学級定員ですら四十名になったのであるから、幼稚園は三十五名、三十名或いはそれ以下に当然しなければならぬ、という考えが間違っているだろうか。こうした問題が解決されねば、すべての幼児に日常生活の基本的生活習慣を身につけさせることも、豊かな情操を養い、健康で安全な生活ができるようにし、人間尊重の精神にもつく道徳性の芽ばえを正しく伸ばすこともできない。文部省は幼稚園教育の現状と改善の方向の中で、好ましくない社会的影響が多いので、これらの影響から幼児を守るとともに、社会環境の

改善につとめる必要がある、といっているが、幼稚園の先生に訓辭をたれているようにきこえる。しかしそれはおかどちがいて、そうしたことはもつと為政者が反省してもらわなければならないことである。できるだけすべての幼児が適切な環境で幼児教育を受けることができるよう、あらゆる施策を進め、制度面でも根本的な検討をする必要がある、といっているが、その施策を、根本的検討をいうだけではなく実現してもらいたいものである。

幼稚園教育要領における六領域は、相互に有機的な関連があり、総合的に指導すべきであることを、教育課程の改善の中で明示するといっているが、これまた当然すぎることで総合的にやらなければ幼児はついてこないのである。ところが小中学校と一貫した、ということをあまり強く主張すると、つい現場の教師たちもまた親たちも、その一貫ということをはきちがえて、知識や技能の習得にかたよった教育を考えがちになり、要求しがちになるのである。小学校教育の現場の中にも、教育学者の中にも、小学校の低学年の教育方法は根本的に考えなおさねばならないことを主張する人は決して少なくない。小学校に入學すると、教科主義的に知識のこまぎれ提供をはじめ、四十五分授業、十分休憩またその繰り返し、こんなことをするから、勉強の嫌いな子どもができてしまう。むしろ低学年では、多分に幼稚園的なやり方でもっていく方がよいのではないかとさえ考えている。私は幼小の連関などという問題があるときまっ

て同じことを声を大きくして繰り返す。それはなにかというと、幼稚園の先生が小学校の先生のやり方を見に行くよりも、小学校の先生が幼稚園の先生のやり方を見学し、その中からもつと学んでもらいたい、ということである。また総合的ということも抽象的にいったところでできるものではない。総合的にやりやすいような教育環境がととのわなくてはなかなかむずかしい。例えば、花と蝶のお話も、お話だけでは、絵本の絵だけでは、子どもの興味や関心を、そして花がおなかの空いている蝶に親切にしてやるという寓話にたくした道徳性の芽ばえの心情も、もりあげることではできない。保育室の外に花壇があり、そこにきれいな花が咲き誇っておれば蝶も蜜蜂も飛んでこようというもの。さあ、花壇にいて、おなかの空いている蝶さんや蜜蜂さんを見ましようね、ということになれば、子どもは教師のことばがことばとしてだけでなく、実感をともなうて理解されるのである。幼稚園の先生が、施設の完備している幼稚園を見学について、園内をみてまわる時にもらすあの深い溜息、その深い溜息の中にはさまざまな深い意味がふくまれているのだと思うと同時に、こうした先生方に溜息でなく新しく湧きおこる希望、そうだと早速帰って、自分たちの幼稚園もこんなふうに変えてみよう、という確信をもたせたいと願う。しかし現状はその反対で、溜息のあとに残るのはあきらめととめどもない絶望感だけである。なにが彼女たちをそうさせているか、どんなつたない幼稚園の教師でも、薄給

を耐えしので二、三年も幼児と接している教師なら、幼児教育の使命観はつけやき刃ではなく本物が光りはじめているはずである。

ところが光りはじめた本物の刃を錆びさせてしまうのは、幼稚園の貧困が最大原因である。これを私が一番はじめにいつている国庫補助で大中に、それができなければ除々にでもよいかからなくしてもらおうではないか。科学技術振興にも金をかけるならば、幼児教育振興にも金をかけてもらおう。文化国家、社会福祉国家が看板ならば、大蔵省あたりで一九〇〇億、二〇〇〇億にもおよぶ防衛費をなんとかせずともらって、一〇〇億でもその半分でもいいから幼児教育振興にまわしてもらおうようにしたいものだ。そうしたら、水のすくない金魚鉢の中に、たくさんおよいであっぶあっぶしている金魚が、新鮮な水をたくさんあたえられて元気に泳ぎ出すように、幼児教育は面目を一新して活発に泳ぎ出すことだろう。日本の幼児教育は世界のどこの国にも決してひけをとらないだけの實力をもっている、ということ、海外の幼児教育を視察して帰ってきた人たちが口を揃えて述べている。小・中学校が先だとかなんとかいっているのは尻の穴が小さすぎる。段階的に見ても乳幼児の保護、教育がまず先に考えられねばならない。厚生省・文部省はいたずらな縄張り争いなどはやめて、文化国家、社会福祉国家という二本の旗をこの乳幼児の保護・教育の面では一本の旗にまとめることができるはずである。もつと話し合って進んでもらいたい。子どもをもつ親、これか

らもつであろう人々はこそって賛意を表明し指導をもってむかえるにちがいない。

教育課程の改善の中で、幼稚園教育は、家庭教育と密接に関連して行なわれるようにする、そこで幼児ひとりひとりについて家庭との連絡を密にするよう配慮するという主旨のことが述べられている。このことも当然すぎるほど当然なこと、それが大切であることはわかっていても、幼児の数が多くてはなかなか徹底できない。ここでいろいろな方法で、その徹底をはかろうと現場では努力している。ところがいいない。家庭の母親は幼稚園との密接な関連ということはことばでは理解していても、幼児の現状に還元して考えることができないのである。最近の母親は或る意味で幼児教育に関しては頭でっかちになり過ぎていく点があり、そこで文部省がいうように、わが国の家庭に見られる幼児への盲愛や放任などからおおる欠陥を是正するということになるのである。幼稚園ではあれこれと考えて、毎月一回、母の会をひらいて、いろいろな分野の先生を招いて話をきく機会をもっている。しかし話を聞いたりするだけでは、なかなか幼児教育の問題の所在をつきとめることはできない。そこで私はこんな実習をおすすめする。即ち母親の一日入園である。つまり貯金というのがあるが、幼児になったつもりで母親が一日入園をするのである。もちろんその日は子どもはおばあさんなり、父親、時には隣りのおばさんに預けて、母親だけが、通園カバンをもって幼稚

園に来るのである。おとなが童心にかえるということは口ではいつでもなかなかむずかしい。教師もさそてれ臭いだろうが、その日は母親を幼児のつもりで保育するのである。一人ひとりの祝診からはじまって、手洗い、うがい、出席カードをはるることから、カハンをきめられた場所にかけること、自由保育の材料をつかってなにかをおもしろいにするのである。その辺で一区切りをつけて、もし幼児であったなら、これまでの時間空間の中でどんなことが起こるであろうということ母親にいつてもらうのである。それこそ自由である。ところが幼児一人ひとりのことについては割合にこんなではないかあんなではないか、こんなことが起こるにちがいないという見当はついても幼児集団の中の集団行動や個人行動については見当がつかないものである。そこで教師は日常保育の実際例をもち出し、具体的に幼児の行動に關しいろいろな事を説明する。朝幼児が家を出る時、なにか気にくわない事があったり、寝不足だったりすると、祝診の時に、かんたんな「おはようございます」もいえないこと、手を洗って、その近くにタオルをかけてあっても、ズボンで手を拭いてしまう子のおること、出席カードにその月のマークがはられ、その数が日増しに多くなるというそんなちょっとした事を心から喜んでゐる子のあること、自由保育の環境を細かく配慮しておくこと、子どもは実に生き生きと活動をはじめ、こうした中で子どもの創造的な活動が最も開花し発展すること、しかし、ちょっと

した心遣い、即ち机の上ごとに子どもの作った紙屑箱をおいたり、部屋のどの部分で積木遊びをするという約束がすっかりできていないと、子どもの活動に統制がとれなくなってしまうなどのことを、母親は幼児と同じ活動場面で説明されることによって、はっきりと知ることができよう。つづいて外遊び、体操、部屋に入る、この辺でまた一区切り。子どもたちが遊具を使ってどんなに体を動かし、またそれをどのように使うか、男の子と女の子の遊びがどのようなちがいでなされるか、こうした遊びを夢中でやる子どもの服装は、どのようであればならないか、母親は実感をもって知ることができよう。次に一斉保育である。子どもにきかせる童話を、幼稚園の先生はどのように耳から目から、時には子どもの全体を動かしながらさせるものかという事を母親に体験させるがい。おそらく、その一度の幼稚園実習は、家庭における母親は、いかにして幼児にお話しをするかという、家庭教育の一課題に大きな示唆を与えるにちがいない。一斉保育につづいて、昼食。母親は子どもに持たせるお弁当を、子どもの椅子に坐って、子どもの机でひろげる。家庭で一人の子の食事がどんなにかかるか、それを幼稚園では一人の教師が三十人、四十人の子どもの食事指導をするのである。食事をしてゐる母親に、子どもたちの食事の際にどんな事態が起こるかについて説明をする。お弁当に熱い御飯をつめてすぐふたをすると、お弁当のふたが子どもの力ではあけにくくなるこ

と、子どもに適當する分量、心のこもったものでないと、子どもは他の子どものお弁当をみて悲しい気持ちになること、箸は丸いものにはころがってしまう、そこで四角なものがよいこと、などという頭の中ではわかっていた事がはつきりと再認識されるにちがいない。こうして母親の一日入園は終る。しかしこうした試みを一日だけに終らせないで、少なくとも各学期ごとに義務的に一、二回必ず実施することによって、幼児教育は家庭教育と深いつながりのあることを強く母親の心に刻め込ませることができにちがいない、私はそのような母親の一日入園の試みを幼児教育における母親教育の義務制化とよばしてもらふことにする。

文部省のいうように、幼児ひとりひとりについて家庭との連絡を密にするよう配慮する、という事は、幼児教育においては特に大切であると思われるが、いながらなかなかできずにおるし、またできる母親は、わが子可愛いさが先に立って、あまりにも必要以上に手をかけすぎたりするために、文部省のいうように、子どもを甘やかすぎている。幼児のうちにもっときびしくして、心身ともにたくましい子どもをつくるのが大切だ、などということになってしまふ。幼児を幼稚園にやって教育するためには、教育がうまくなされるように、幼児の身のまわりを家庭できちんと物心両面にわたって準備してやる必要がある。そのつとめを忘れて怠ったりするの

で、子どもは集団生活の中で戸惑ったり、時には集団の中にへんな

優越感を持ち込んだり、その反対に集団の中で劣等感をもったりするのである。

そうしたことが結果的にみて幼児の教育に多大のマイナスを与えらる。そのマイナスの結果だけを見て、母親はわが子を不憫に思い、ついその不憫さを、甘やかすことによっておきなおうとする。しかし、そのマイナスのよって来る原因を考えようとする、つまりは幼児の生活に対する根本的な理解が足りないのである。幼児の身のまわりに対する物心両面にわたる準備さえ正しければあとは愛いなし、「幼稚園の先生あとはよろしくお願い致します。」といったすつきりさがないのである。そうしたすつきりしたものを母親の一日入園という実習で母親の身につけさせようというのである。

幼児教育の中で母親教育の義務制化、たいへんおかしな論議になったような気もしないではないが、私はあえてそれを強調し、それをさまざま形て実施し発展させることが、ひいては小学校における子どもの教育にも良い結果を及ぼすであろうことを信じてうたがない。

前半で幼児教育に関する文部省の考え方に対して勝手な暴言を吐き、最後に幼児教育における母親教育の義務制化などという、突拍子もない論議を出し、木に竹をついだような事になってしまったが、暴言多謝、意のあるところをおくみとり願うとして、現下の幼児教育論議といたした次第である。

(東京家政大学)